

# 読上競技コレクション #4

## 行間読上モデル

北海道 西村 友幸

- #1 置き手としての選手が代わる代わる読み手を務める（一人二役モデル）
- #2 読み手としてのコーチと置き手としての4人の生徒が協奏する（算読連携モデル）
- #3 5人のメンバーが即座に覚えたパートをリレー読みしつつ暗算で置く（一人二口モデル）

一口に「引いては読上委員なり」といっても、読上委員のいない読上競技にはこのようにさまざまなパターンがありうる。個人競技もあれば（#1）団体競技もある（#2、3）。置き手に筆答させる場合もあれば（#1、2）口答させる場合もある（#3）。しかし、今までに紹介してきたモデル #1～3はどれも、音声情報を聞き取って計算することを置き手に要請している。何を当たり前のことを言っているのかと怪訝に思われるかもしれない。読上算は、見取算の視覚に対して、聴覚が数確認の主体をなすものである（『珠算事典』1,015頁）。だが、これとて業界で当然視されている常識の一つにすぎず、見直してみる価値は大いにある。問題を聴覚で聞き取るのではなく視覚で読み取り、計算の結果を読み上げる。インプットではなくアウトプットが音声として発せられる。そんな倒錯した読上競技があってもよいのではないか。

### 名前の由来

かかるコンセプトを具体化したものが、今回提案する「行間読上モデル」である。誕生したのは2019年の11月末だが、名前が付けられたのは『サンライズ』2019年12月号が届いた後のことである。

その号の「算人寄ればもんじゃ焼」では、同年10月号に掲載された土屋宏明「夏を終えて」に関して、高柳和之編集主幹が「こうした文章の行間から、多くを感じ取れる人間でありたいね。読み流すだけではもったいない」と述べておられる。けだし至言である。せっかくなので読み流さず、生まれただばかりのモデルの名前に使わせてもらったしだいである。

ちなみに、私自身は土屋名人の件の文章の行間から「2019年8月号の『令和に御破算で願いました』を読みましたよ」というメッセージをくみ取ったのだが、もしこの解釈が事実と相違ないとすれば大変光栄なことである。青葉計算アカデミーの大関一誠学兄には、同様のメッセージを本誌で公に発信していただき（『サンライズ』2019年10月号、23頁）、感謝の念に堪えない。拙稿を読んでくれている人はちゃんといる。このような確信が持てるからこそ、本シリーズの制作にも熱が入るのである。

### ブリコラージュ

行間読上モデルは、先にランウェイを歩いたモデルたちから「引いては読上委員なり」というポリシーを引き継いでいる。読上委員になり代わって読み手を務めるのはやはり競技者自身である。ただし、既述のとおり競技者はアウトプットすなわち計算の結果を読み上げることになる。

これも既述したように、競技者はインプットすなわち問題を視覚で読み取る。読上算の別名は「聞き取り算」であるが（久保純編『ソロバンの魅力

を『探る』(暁出版、223-225頁)、行間読上モデルにこうした別名は似つかわしくない。むしろこのモデルは、インプットの面では「見取り(暗)算」なのである。

4,625  
6,013  
3,802  
5,978  
4,719

競技者には上記のような問題が視覚的に提示される。各競技者がなすべき仕事は、行と行——珠算用語では「口」と「口」——の間の差を計算し、結果を順次読み上げていくことである。

- (0口目と1口目の間)「4,625円なり」
- (1口目と2口目の間)「1,388円なり」
- (2口目と3口目の間)「引いては2,211円なり」
- (3口目と4口目の間)「加えて2,176円なり」
- (4口目と5口目の間)「引いては1,259円では」

問題を視覚的に提示する手段としては、紙面と画面の2種類が考えられる。画面を使ったほうが、観客にも問題を知ってもらえるなど数々の利点があるので、そうすることにしたい。

ブリコラージュという言葉がある。ありあわせの道具や材料で済ませることを意味する言葉である。行間読上モデルもブリコラージュで行きたい。画面に映し出されるのはモデル専用の問題ではなく、フラッシュ暗算の問題である。

### 競技方法

繰り返しになるが、行間読上モデルは「聞き取り算」ではない。しかし、これを競技化するにはパートナーとしての聞き取り役がいたほうがよい。よって、競技へのエントリーは読み手と聞き取り役がペアで行う。二人で一つのユニットを形成するので、行間読上モデルは団体競技に類別される。

演技の順番が回ってきたら、読み手はステージ上のスクリーンを向く。あるいはスクリーンと同じ画面の手許のディスプレイを見る。そこにフラッシュ暗算の問題が映し出される。ただし、数が切り替わるテンポは、フラッシュ暗算競技の場合に比べるとだいぶ遅い。さもなければ、行間を暗算して結果を読み上げていくことなど到底できないからである。

一方、パートナーの聞き取り役は、画面を見るのではなく(聞き取り役が画面を見ることをルールで禁止するとともに物理的に不可能にする)、読み手の声に耳を傾けて暗算で置く。

4,625  
1,388  
-2,211  
2,176  
-1,259

左記の例題の読み手の音声を文字起こしすればこのようになる。聞き取り役が「4,719」という解答を提示できれば問題クリア、できなければファールである。解答の正誤は、元のフラッシュ暗算問題の終い口を参照することで判明する。

### 新提案に事寄せて

行間読上モデルでは、同一問題の正答をめぐって複数のチームが競い合うことはない。ある問題に対応するのは一つのチームであり、他のチームには別の問題が供給されることになる。問題をクリアできたチームは次のレベルに進む。ここではバーの高さつまり問題の難易度が一段上がっている。では、問題をクリアできなかったチームは? 陸上競技の走り高跳びでは、同じ高さに最大3回までトライできる。これに鑑みると、珠算競技の一算落としという既存ルールは極端すぎないだろうか。是非この機会に再考願いたい。

次回は「<sup>ふたやれんが</sup>双八連歌モデル」を紹介する。

(小樽商科大学大学院教授)